

## 玩具①

当館は20世紀前半に中国大陸や台湾で収集された玩具を約2,000点所蔵している。これらは日本国内はもちろん、現地でも残っている例が少ない貴重なコレクションである。その玩具資料を数回の連載にわたって紹介していきたい。今回は音や動きを楽しむ玩具を取り上げる。

まずは音を楽しむものを紹介する。図1は張り子の獅子に、土台と車輪を付けた玩具「獅子車」である。背後から押したり紐を付けて曳き歩いたりすると、首や尾を振りながら足もとの子獅子たちを回転させ、後脚付近に付けられた金属製の太鼓を賑やかに叩く。



図1：獅子車 20世紀前半、  
中国遼寧省 長さ60.0cm

子獅子の回転は、獅子の足もとに据え付けられた2枚の円盤（それぞれ青と緑の彩色を施した土製の子獅子が乗っている）の底が車輪とわずかに接触し、車輪が回転すると摩擦によって円盤が水平方向に回ることによって生じる。また、太鼓が鳴るのは、車輪の回転と共に車軸が回り、車軸に付けられた2枚の金属片が麻ひもで結びつけられたバチを弾いて太鼓を打つからである。金属のバチ（長さ約5cm）の下に太鼓があり、それを打つ度にパンパンと音が鳴る。

また、土台部分は細い金属棒を溶接して組み立てられ、土台・車輪共に緑の染料が塗布されている。車輪にはタバコを入れる缶の蓋と思われるもの（直径約7cm）を使用している。4つの車輪に刻印されているのは中国・イギリス・アメリカのタバコ会社の名称で、それぞれ「中国南洋兄弟烟草公司香烟」「CHINA TOBACCO MFG,CO,LTD SHANGHAI」「W.D&H.O WILLS BRISTOL&LONDON」「TOBACCO PRODUCTS CORPOLATION RICHIMOND VA. NEW YORK U.S.A」と読める。当時の中国大陸でタバコを販売した会社を知る手がかりになることに加え、それらが玩具の部品として再利用されている点が面白い。



図2：芝居人形「鬚人」 20世紀前半、中国  
左端の人形の高さ15.5cm 盆の径25.5cm

次に、動きを楽しむ玩具を紹介する。鬚人（図2）は京劇の登場人物に似せて作られた人形で、盆に載せたままその縁を棒で叩くと軽やかに動く。動きの秘密は底部に付けられた硬い馬毛（または豚毛）にあり、これらが盆の微妙な振動をとらえ、あたかも劇を演じているかのような動きを人形にさせるのである。

鬚人の台座（下半身に当たる部分）は粘土で円錐形に作られ、その底部には外周に沿ってぐるりと一周するように2～3mmの硬い毛（前述）が貼り付けてある。頭部および手部分も同様に粘土で、各部を繋ぐ骨組みは針金で作られ、その上に彩色が施

された紙製の衣装を着せる。顔には目・鼻・口のほか、その人物に合った隈取りが丁寧に描かれ、さらに頭飾り（頭部と同じく粘土製・一部針金使用）が付くこともある。

なお図2右端の武将の髭には、リアル感を出すために綿毛が用いられている。また、両端に位置する二体の武将は竹ヒゴと紙で作られた武器を持ち、旗指し物を背負っているが、左の人形は腕が固定されておらず、振動を与えると肩より先の部分がゆらゆらと揺れる構造になっている。

鬚人を載せた真鍮製の盆は、この遊び専用のものである。叩いた時の振動が伝わりやすいように、盆全体を可能な限り薄くするなどの工夫がみられる（ただし棒は付属品ではない）。もちろん別の容器上でも鬚人は動くが、この盆に載せることでより滑らかな動きを楽しめるのである。

鬚人は、清の光緒年間（1875～1908）に王春佩という人物が初めて考案したとされる。鬚人のモデルは京劇の人気演目である『三国志』などに登場する武将が多かったようだ。

鬚人と先述の獅子車は2013年現在、当館1階中国・台湾コーナーに展示中である。

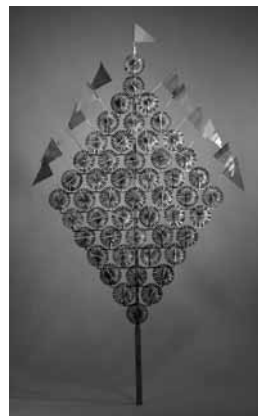


図3：風車 1999年  
北京市にて制作 高さ228.0cm

この他に、音と動きの両方を楽しむ玩具もある。風車（図3）はかつて北京の子供達に好まれた。1930年代の北京では、旧正月（春節）になると、寺廟の祭（庙会）に出る露店や琉璃廠（故宮の南西にあり高級文房具や骨董品などを扱う店舗が多い地区）付近に立ち並ぶ市で売られた。風車を買ってもらった子供はそれを高々と持ち上げて走って帰り、自宅の門に一日中挿しておいたという。

このような風車は、都市近郊の農民が農閑期を利用して作った。製作手順は、①高粱がらを折って結び合わせ、風輪を支える枠を組む。②細く割った竹ヒゴを丸めて径10cmほどの輪にし、回転軸から紙製の羽根数本を放射状に張って風輪を作る。③粘土で径2～3cmの太鼓の胴を作り、底部に二層の紙を貼り付けて鼓面とする。④風輪の回転軸に金属片を刺す。その金属片に先端が1～2mm程度触れる位置に、バチを糸で結びつける。⑤最後に風輪と太鼓を枠に取り付けると風車が出来上がる。風輪が回転すると背後の軸も回り、そこに付けられた2枚の金属片が竹製のバチを弾いて太鼓を打つ仕掛け（図4参照）が施されており、高く掲げて走ったり、素早くバットのようには振ったりすると、一斉にパタパタと賑やかな音を出す。風輪が1個だけの小さな風車から、50個以上付いている巨大なものまで、さまざまな大きさの風車がある。

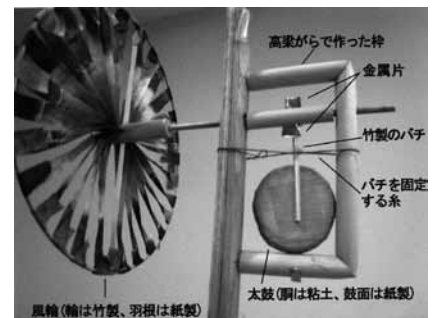


図4：風輪後方部分の拡大写真

現代社会と信教の自由・公開講座参加

深谷 忠一

2012年11月30日、新日本宗教団体連合会主催の「第1回現代社会と信教の自由公開講座 憲法施行から65年―激動の現代社会と信教の自由」が東京の國學院大学で開催され、深谷の他に本教から天理やまと文化会議議長の白木原嘉彦氏、委員の上田禮子氏が参加した。

講座では岩下義治委員長のあいさつの後、京都大学大学院教授の大石眞氏が「憲法と信教の自由―憲法施行65年後の課題と展望」と題して基調発題を行った。続いて、玉光神社権宮司で信教委員会副委員長の本山一博氏がコーディネーターを務めてパネルディスカッションが行われ、その中で、石井研士國學院大学教授、平野武龍谷大学名誉教授、そしてフォトジャーナリストの藤田庄市氏がそれぞれに発題した。

コメンテーターには島蘭進東京大学大学院教授が各発題を踏まえて、公共空間での宗教の働きや責任を自覚した信教の自由の発揮について発言した。さらに、政治と宗教の関係やオウム真理教の問題など、信教の自由に関してのさまざまな問題が提起された。

(8頁からの続き)

「市民のみなさんに。

9月30日から10月2日までの3日間、北海道から沖縄まで全国の車いすの仲間と市民が集い、重度障害者の抱える多くの問題について真剣に話し合いました。たとえ寝たきりの仲間でも、ひとりの市民としてゆたかで生きがいのある生活をおくることができる社会こそ“福祉のまち”です。この福祉のまちづくりは、わたしたちに課せられた使命であり、すべての市民にとって早急実現しなければならない課題であることを確認しました。

わたしたちも市民のひとりとして、みなさんの仲間として、みなさんの強い協力と理解のもとに、心ゆたかな“福祉のまち”の実現を果たすよう、努力します。」

(9頁からの続き)

本資料は、北京在住の風車職人である梁俊氏（1933年、北京東部の通州生まれ）の作品である。彼の家は祖父の代から風車制作を生業としてきたが、1970年代以降は異なる仕事で生計を立てていた。長期保存を可能にするため、本来は紙製である風輪の羽根を絹製にするなど多少の細工はあるが、大部分は昔ながらの技法で作られている。

2013年現在、この風車は当館1階中国・台湾コーナーに展示中である。入館者は息を吹きかけて風輪を回し、背後にある太鼓の音を聞いて頂けるので、ぜひお試しください。

(10頁からの続き)

**法王の特別秘書が大司教に**

今年1月6日、主の顕現節の日に、法王は4人の大司教を任命した。そのうちの一人が現法王の個人的秘書としての、ドイツ人ゲオルグ・ゲンスヴァイン (Georg Gaenswein) 神父だ。この日は特別ミサ（顕現節）の行われる日で、ヴァチカンに対する各国大使、外交官が参列している。その日に任命されることは意義も大きいし、喜びも一入だろう。神父はこの10年間法王の「陰」だったが、実質的には法王の右腕でもあり、法王の一番の協力者でもある。この10年間の親身ある挺身の姿が、法王から認められ、表彰されるというかたちになった。この任命によってゲンスヴァイン大司教は、ローマ法王の個人的秘書という立場と共に、法王庁の長官にもなった。元執事の裏切り行為やヴァチカンの銀行の不透明問題とその責任者の更迭問題、司教達の幼児ワイセツ事件等があったが、ゲンスヴァイン大司教はそれらの事件に巻き込まれることもなく、法王に忠誠を誓って来た。大司教のシンボル（紋章）も発表された。紋章の左半分は現法王の紋章を入れ、右半分はエルサレムの星を上置き、その下にドラゴン（忠節のシンボル）を配している。その儀式にはイタリアを代表して首相のモンティ氏が出席した。

**クレジット・カードの使用禁止**

ヴァチカンにも銀行がある。正式には銀行と言わないでIORという。IORは宗教活動協会の頭文字3つをとったものである。独立採算制で、民間人が長官となり、職員も一般人。ヴァチカンは国務長官を中心にして、委員会を構成し、そのIORの動向を見極め、IORの役員任命権、罷免権を有している。ここ数年、IORのエットレ・ゴッティ・テデスキ長官の下、IORにダーティ・マネーが蓄積していた。2010年の時点で2,300万ユーロ（日本円で約25億円）が、ローマ検察庁によって差し押さえられた。ヴァチカンの銀行といえども、イタリア銀行からイタリア市中銀行同様の監視を受けている。IORの取引銀行のナンバーワンはドイツ銀行だ。昨年EUのマネーヴァル (Moneyval) の調査を受け、16人のメンバーのうち9人は問題なしの判定で安堵していたが、やはり不明朗な所が多かったのだ。そのために、イタリア銀行はヴァチカン内部での取引は全て現金で行うこととし、クレジット・カードでの支払いを禁止した。これはヴァチカン内にあるスーパーマーケットでの支払い、ヴァチカン博物館の入場券の購入も一切現金でなければならないと規定した。